



本居宣長集

目次

- 一 哀眉春ハ亥火ミ出見尊ハ考
一 くもき
一 あこゆ
一 たゞちふ
一 いまとく
一 まき屋家
一 とさ
一 やくまくらのく
一 谷く

曹
門號
卷



一 玉けき

一 後園

一 白酒玉園

一 清多

一 たちそれ

一 小そとひもれ

一 うすうすえ

一 くまゆく

一 ねじゆき

一 陸奥のあつよ

一 ちのまおやこ

一 薙東あつまめ道考

一 富士の名義考

一 力筋のけづり

一 玉ぼ

一 麻火屋

一 カゑり代富

一 のまのまく

一 ちづる葉

一 くび牛

一二鶴の刀せね刀 一 あさく

一 高田興隆があさくの三種の名をうりて書

一 さくとくのね

一 まゆ園庭ホトツノ翁

一 かじゆうのね

一 十りやう

一 黒竹河竹

一 三重川

○咲眉春八彥火乞出見尊考

世に七福神とてあり、史記に嘆眉主とつて像とぞれ
皇御國の神とほもゆめぬとどいする神、いづれも此佛名
れ知る人有る。蛭子とばらうえて蛭子とゆき額より蛭子宮
島主事祠戎社をもゆき事戎のり、えひと乃假名
こそ蝦夷を日本書紀小愛涌詩とかりまとてモリゾト
中國よりゆり云称せむ。蛭子とまじひ伊弉冊尊のくもすせ
も變相の蟲とゆきんら。ト
る御子とて古事記より父義度迄興而生子水蛭子此
子者入葦船而流去舊事記書紀小次生蛭子雖已三歳
脚猶不立故載之天櫂檣船而順風放棄とあり

とつれし物をいもひとこもむじて、筑前彦の文学
龜井道載がわくよ詩のう横嶽二十四境のう小姫子
祠といへるをつくるふ伝體とす。いまとよめあす
あらまことひゆうふかくにわくよくわくよくわくよく
まくよくわくよくわくよくわくよくわくよくわくよく
わくよくわくよくわくよくわくよくわくよくわくよく
わくよくわくよくわくよくわくよくわくよくわくよく
出是年、火を出見尊自有山幸始兄弟相謂曰試欲易
幸弟彦火を出見尊自有山幸始兄弟相謂曰試欲易
下クガモアトカタラニラウニカバゾモルニアノイツナサタエバ
幸遂相易之名不得其利云々况忿之曰非我故釣雖多

ナリトモエドテジトイニテイヨクセナハアリキ
不取益復急責故亥火を出見尊憂苦甚深行吟海畔時逢
鹽土老翁云々海神乃集大小之更逼問之僉曰識唯赤女
比有口疾而不來固召之探其口者果得失鈎已而亥火
乍出見尊因娶海神女豐玉姬仍留住海宮已經三年
亥火出見尊已還宮一遭海神之教時兄火闌降命
既被危困力自伏罪曰從今以後吾將汝優之民諸施恩
活於是隨其所乞遂赦之ちとあふるのうじくあひ
セア抗讐と並坐とちとあひ豊玉姬もうべしとあひ
つゝかの脚名の嘆眉主は爲笑の義うづく眉とあひ
義とあひ讀法ほり惠美圓嘆瑞春とあひ

宁ろ拾遺官ニ右近ノ脣下郎
其の元人を残す事
其の後去ノ事跡が書かれてゐる
事ありて右近の事
事跡が残されてゐる事
事跡が残されてゐる事

○ 桂子散

又同ト東に「ひまきのとひみきのちん高まリ雪立ト
うばササ子のまくを」黒川源の世ノサ秋也モモヒコ
様と事とせか子の事と別と云ふ事もあつてゆゑも
せよもともとひそひて様々木秋也「よのづるや秋也」と
ほり「わが木秋也」あり「つるやうもん」も「ゆきもん」
又モセに「はまめとほま山の里も様りえまれる木のさうもとゆ
けうやまちく「ま様」と立「たれ」ハさうもとゆ「とせ秋也のまわ
うらわとくわく人のか」「けうもとゆ」ハ若きもとゆ「とせ秋也のまわ
すもとゆ「とせ秋也日本根木仁内又室の即はくま宮をり御裏や
いのちく「ふきもとゆ」サ秋也「じゆく」トゆ「とせ秋也

卷之三

○
五
三
一

卷之三

垂乳根と母乳味を垂て見てやるゝのを柰り。宝集中
にやふち浦とて母のまづるをうかがひ。其事とよきも
しは母をあやうてわやとよきりとて古今良とゆくも
ほのちやうをうかう。父とちよちとゆきやうをうかう。
ゆうて物に至るに、ちよちとゆきやうをうかう。物に
ちよちとゆきやうをうかう。物にちよちとゆきやうをうかう。
父とちよちとゆきやうをうかう。父のよりもくとつる。
ちよちとゆきやうをうかう。父のよりもくとつる。
ちよちとゆきやうをうかう。父のよりもくとつる。

をかくらぬの疑を止む

右證ハニナニ有の所教す。署をたゞほのまづる。

○みをく

万葉十二卷水呑衛石心畫而といひ教ハ延喜或第廿難或
云允難波津ノ頭海中立漂漂と字ハ漂漂とけび名の意
ハ水脉津織と津ハ耶詔アリケ初水呑衛石と書る恐ニ
不審ヤ音訓よりに考モアベトニ詩をくわべテ裁の
字也傳字もあやうやう字也水脉津織と字也

○いとひ

同集十二卷水呑衛石心畫而といひ教ハ延喜或第廿難或
我モよひん五代主ヒヨウシモアヒタモアヒタモアヒタモ
吉主河門主トキナニに川の際のいとほげてとよかがく柏ハ

名門のある石門をくわう石門口とよんで設け
景行紀云天皇初將賦討次干柏峠大野其ノ野有石長六尺廣
三尺厚一尺五寸天皇折之曰朕得滅土跡殊者將蹊茲石如指
葉而舉焉因テ蹶之則如柏上シテ於大慮故号其石曰蹠石これふ
よも又曰蹠石也

○正月元日

○
○
○

左大臣長屋王の儉約を是に比べてあらざり
尚書竜中範宗クワントウ檢篇ケンバン曰天聖代之君爲半節儉富貴廣
大守之ルナシテ以約歟智聰明守之以思不以身尊而驕人不以
德厚而矜物茅茨不翦力束縳不リツク舟車不飾衣服無
文り是より來即ヤマトとある脚ヒヅメと來縳不剖ハラフと白刀毫
ちと一弓のやみひく不ムカ文ムカのまゝとあり

廿二年正月廿四東都小等皮乃歸
余守佐藝林良俊里半佐毛称李啟古由惠尔波併余
许昌汝州之南有山名曰少室其北之

ゆつて將へり免て御らすやうるわざして見ゆれ
しをとて御ゆるにゆふせりとすころひえ
きらえり 大和や萬よしきを兵部の吉よ中納言の君
まひて御ひそりてりす かくしてほの言
さきへじるはれ

宿生の處もまにはる とすとすてそくやくすみゆ
あに取とよどむ くまくまにゆのあひ倒とうひよ
もすらむちゆにき是をとくらせてらぬふをり
おう、とよとよとよとよんとよ

○

萬葉集卷十六に「門の名のうすも百千字千多字あると
思ふ」けれどもあれと同音とて通じるが解てはよど
きと又何の複の事をちうあくともとつてや 百千字千多
字あるとす百千字とカ百つまよもよとよとよと
すとよとよの一名をあらびていじたとてあはるをばとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
一首の詩を百千字と云はるにまの所れ又複筆とよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと

三月と申すと御所に御入る人、おもてあがむあらぬ事
二条家にて名高き逍遙院内房公の如き
百あらまく御内侍にあらまのまよつまうじゆゆき
とあらよ内房公、古今傳授の人をうそむく御内房公
をもうへどりのひと

○やまとじふ

萬葉集序の山口セ玉の間に物をすくふとえとせなま
しむ京ふゆくとくわらうの「禁麻強」歎のよすり物語
乃意の先端えまとく度ちんきゆめよし度をくつて度
すまかなま上毛歌をうたひて其をすまきをくら

ちうで改てすまかく今のがれを歌ひをうるすとてす
ハちまくうつて半^{ナカ}すまをす假令^{シカ}あととくにゆの義
あゆむけてる「水^ミすまくい湯^ヨかくへくみつまく
さちが懸^{スル}すまがけ教^シのまかひとくにわら思ひを
のよづん^スまふ尼^ヌせんとくまくのちまきを

○やまとじふ

玉峰の川上に^ス「あれと見ゆるもあらんあらん」
釋^ス被^{ハシ}西^ニ川上とあらとおひかくとひづくもんを
かがみを問^フひつねじろよ行^フあらまよ行^フ

○やまとじふ

○谷之

万葉集第五上憶良金及感傷長歌の中に天をかのふ
古事記サジキ ふくめさるまつみ 舞モク すくすく六ふ鳥鳴虫聲も
谷隣タマツ と事アリ てやひきくらゆづ蝶テフ の里名也
りゆくよひあらうすくまくわくくくればなたかくわくく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
鶴ハク をゆやくくくくくくくくくくくくくく
古式コシキ 年祝ヨハシメ 谷摸能枝度極ハシメナリ とわふが主
とひやと修ヒヤウ まむまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

○ いなせ

萬葉集卷十六に否ル諸々下界禪の爲めに可也

あつて今も日本記ノ諸セセトヨウシテハシテモハ
ノヨリ被カムニセヤトシハアラシヒタモヨウ

○玉はく

まゝ葉草第十六巻の中此題、詠玉掃籜天木杏棗教
釋云玉掃ハ第二十に實字ニ年正月三日内裏ヨリ王臣に玉掃
を賜リテ肆宴ナリシ内侍持の物也。ゆゑのうす玉はき
トヨウウナムトヨウテ玉達の異號ナリ。よみどり今之題玉勅小
使に玉嘗ハスモルアリトシテヤクモルジトケテアリトス
トシトハ字嘗セタリ。草多ナリ爾雖云
荀平藝郭璞注云玉帝也似蘿其樹可以爲掃墓江

五はさやくに備麻呂もとひづかのゆばもと
却対云備麻呂の名をもとて奴すゞのゆばにひづか
拂毛子にえりそめらきりし備毛もとひづかがふほふ
きくら座多知もとくじゆくみふり但ヒ弔とばうがふ竹
もとくじゆくはり袖名ちるはる羽羽をもとくと口の弔
角ひげすり本草地膚のひに櫛弔落弔玉莖玉弔掃
弔こうとの異名に叶へ王弔と玉弔より玉弔に似ひ

○後編

是事無十ニ以野川のひもを乞ふ者有り我々ち
なむとす 那御事也後世ハ下顎ニシモツロ
ヒテノ事あり神代紀云上顎是
大疫下顎是太弱ニ今能之可也乞之弱き事也

○白肉黑肉

方無量寫十九天平勝寶四年十一月二十日新嘗會肆
寫

從三位知奴齋真人

延祐式第十四 造酒式云新嘗會 白黑二酒料 云又云造酒者
米一石以二斗八升六合為蘖アハタニヤ七斗一升四合為飯含水半斗アリヤ

卷之三

とひきとくとくとけほふかくくら

○たちばな

万葉第一ハ天平感寶元年四五月廿三日大伴家持卿の
橘の長物アリ。あまきくちやふかくもあらうの神の
御印世小田道間守常世タケミタコヨ下吸。沸瓶和名鉢。云
橘一名金衣和名太
知財奈南方草木、狀下云白華赤實皮聲有
美味人アリ。橘とくわの毒蜜柑と名づく菓也。俗
にたちちのゆうの桜子の他てかく皮の色變りてあり
や。人吹きが酸く。芳く。美味也。凡つ橘と桜も
絆カハシマ也。

○山芋もじのれ

ありの山芋の色もあてやくいづくちの事。あても
御釋云山橘ハ言塵故云世俗也。アリ科アリツキ也。
繋ツキの内山芋にそくすます。アリは萬にあくまでも
中に生せ。草部の中にアリ六帖。そぞが後が細々。
木ハソノサヘ山橘とある。アリツキ也。延喜式造園式
の大嘗令御供物の注文に弓弦葉寃生真前鳥。日蔭山
孫組山橘子袁等賣草、各ニ擔。アリ。寶の珊瑚のぬくな
さよのすくぶ色もくもつてや。古希小野。古今に支多
え。も山橘の名す。ちのへとく。

○三十九

○
○
○

色ふぢやうよみうす年九月既に嘗ておひとゆのまことの元

卷之三

亦頗る上人の御所に心を拂ひて居ます。然るに
さうかうする今おもふくらべ、前日アヤの事ハ
あきや上人のことにはすこしもあつたが
あきや上人のことにはすこしもあつたが

○あざは祭り

萬葉集四卷三十六
百日やく涼のまことに我意もひきしめ
鳥原^{アトリ}御新^{アマニ}云神代上卷をひそく然是日神先食其十枚飯
化生兒^{アマミコト}瀧津鳴雉命亦名市杵鳴雉命まれが鳥原^{アトリ}市原^{アマミコト}
モウサウハ百日やく涼のまに我意のむすめあまくらめ
シテモテヤド其まごる事ハ鳥原^{アトリ}御原^{アマミコト}の事
えん爲^{アマミコト}すまごとあるに便^{アリ}すかわとあまくつすくわ
ヨヒナガサヒモトツモジの白波^{アマミコト}とづんまくひりあまの海
りとあうえのまぐひけ章^{アマミコト}とゆひしてやま

万葉集廿二十九年正月に今ぞすが防人^{アマミコト}船也なる海至^{アマミコト}に傍^{アマミコト}のまこと^{アマミコト}亦
後^{アマミコト}此の物^{アマミコト}を引^{アマミコト}ておもひすが鳥原^{アトリ}の神^{アマミコト}も別有^{アマミコト}

○陸奥^{アツマ}あづま

松屋文儒^{アマミコト}隠^{アマミコト}が茅セ^{アマミコト}棟梁^{アマミコト}萬^{アマミコト}告^{アマミコト}嬪^{アマミコト}枝東山東^{アマミコト}いづれ
稱^{アマミコト}ちゆど出羽陸奥^{アマミコト}に^{アマミコト}すた^{アマミコト}あづまちの通^{アマミコト}はづま
常陸^{アマミコト}と^{アマミコト}よあた^{アマミコト}けやゑふと^{アマミコト}と^{アマミコト}あくと大寢庵^{アマミコト}立綱^{アマミコト}が云
萬葉集十八賀^{アマミコト}陸奥^{アマミコト}出金詔書^{アマミコト}歌^{アマミコト}に鶴^{トリカ}鳴^{アマミコト}東國^{アマミコト}能^{アマミコト}羨^{アマミコト}知^{アマミコト}
能^{アマミコト}久^{アマミコト}久^{アマミコト}と短歌^{アマミコト}すと復^{アマミコト}賣^{アマミコト}呂伎^{アマミコト}能^{アマミコト}御^{アマミコト}代^{アマミコト}佑^{アマミコト}可^{アマミコト}延^{アマミコト}年^{アマミコト}等^{アマミコト}阿^{アマミコト}
頭^{アマミコト}麻^{アマミコト}奈^{アマミコト}流^{アマミコト}羨^{アマミコト}知^{アマミコト}能^{アマミコト}久^{アマミコト}夜^{アマミコト}麻^{アマミコト}尔^{アマミコト}金^{アマミコト}花^{アマミコト}佐^{アマミコト}久^{アマミコト}と^{アマミコト}あく^{アマミコト}と^{アマミコト}あく^{アマミコト}
うん^{アマミコト}うん^{アマミコト}を^{アマミコト}あづま^{アマミコト}

○あづまや

又同書に東都稱呼辨^{アマミコト}ノ怪に^{アマミコト}あづま^{アマミコト}あづま^{アマミコト}や^{アマミコト}こ^{アマミコト}る

持篇稱の坂上郎女に報歌安弓射可流比奈能都夜故
余安東比度之可久古北須良は伊家流思留事安里とい
ふうとひきりづく國府を東の都とせられ
うそびるまごときあつて後は書がむに比奈の都とい
ひりよ御よりちやうわよとわらひたる「さあ西京がま
くすり書きにちまとつて又はじ東方からうきのまくはま
「得まね所にて謹む一やうも多本居大年が都夜
故、夜都故のちやうむすめと宦長也あ
まことに夢びて国彦と云ひとづかみづかへ
の朝廷と云ひゆのあくまくも

千葉のやうにひびきをなすがゆゑに
ひりきのよき都夜故とあらわにせまつてや
まくまくと集中するにあらずとあつて
夜都故とすで「子のうそこえをとむるのをよづき
ちゆうせいもあからしにわざ詔ともう人の耳れども、
さんとすくはれをすすめし千葉の都夜故と書くにあ
きてやまくはれとすすめし千葉の郎女にいへり可すれども、
くよるとすすめし千葉の郎女
の「都称比等能故布宣伊敷欲利波安麻里余豆

和禮波之奴信久茶里余多良受也とあらざつて
惠とすくはれをすすめし千葉の郎女
たゞせらにんすくはれをすすめし千葉の郎女
今「鄙のうつてすすめし千葉の郎女
さとすくはれをすすめし千葉の郎女
傳とリて周囲の人と天人となりしむれども、
とうて古今集雜部ふあらびしのむとづれとを今かず
ワカ人ひととわざせうとある天変も天人のと解き
一本よきちゆべのをすえ脣本うは能のすけでひ

すつまにあと假字つらやうと千薩^{チサ}にうつた奈都夜^{ナダ}
あくままで爲葉原^{ミハラ}山^{ヤマ}上^ノ勝良^{セイリ}の^ノ天^{アメ}るひ
ふいつやまくらへてよどみゆくつるをえんりきくま
なまくわざと都^{ミタ}都^{ミタ}外國^{ガイコク}とあくまうつま
の^ノ夷^{ヒナ}の都^{ミタ}とすのあくべ^{アカベ}と^ト今^{アキハ}の江戸^{エド}と東都^{ヒガシマツ}
とつまうちとくちとくちとくちとくちとくちとくちと
びもんばうねりきわくめいとあくくろん都^{ミタ}
りすむ字書^{テレ}う天子^{テニシ}所官^{ノミヤスヒトコロ}とくちとくち都會^{ミタシ}の^ノに
みゆくつくして卿^{ケイ}大夫^{オウ}宋邑^{ソウイフ}曰都^{ミタ}とくち右傳^{ウツイ}大
都不過參^{ミタツ}國^{クニ}之一^トとくち支封^{シヨウ}の城^{シヨウ}を都城^{ミタシ}とし都城過^{ミタシ}

百雉國之害也^ハ。つる南浦文集に薩摩^{サツマ}を國都^{ミタ}
ソナツマシムとある。その事は^{ソナツマシム}の事と見え
ゆく。またにさぬかのうねがとくにかべ今^{アキハ}薩摩
ミタ^{ミタ}国内^ノ支封^{シヨウ}を都城^{ミタシ}とくち國都^{ミタシ}
とくちとくちとくちとくちとくちとくちとくちとく
せ^シ筑前風土記^{シクセンフントキ}太宰府^{タサエフ}西都^{シナシ}豊前國^{ヒサシ}
京都郡^{キョウトノシ}のち^シ他^ハ例^シも^シとくちとくちとく
とくちとくちとくちとくちとくちとくちとくちとく
とくちとくちとくちとくちとくちとくちとく
とくちとくちとくちとくちとくちとくちとく
とくちとくちとくちとくちとくちとく

まことにかくちよ。稱する京から都へゆるを
にゆきやく稱せよ。奈良をも南都へ舊都な
ればありとはりて。東都。いふ。京と西都
もそよもんじゆぢゆ。あるあり。やうゆめど
ひよしれゆやのまく。あくわい。とよとよ
あくわい。ゆかまく。神。うづさむ大御園。よどみ
うづさむ。うづさむ。うづさむ。

○陸奥よりの手追考

作者はいわゆる説小文の筆者であつた。

うとひづれへゆるひりやうにひどき
さんじすとて陸奥出ぬもであまくさんへ降らう古がく
さぐれうたほえじとよしもじうふけ家持のこよひ
たぐ東のうゑ至陸やうそくうてうゑ陸重が吾妻ヤツハニにちくわ
あいばけ外千寄ア初キヨ羽の切カセうめくも
モ記紀のじゆふちくわがけぐれうかぶ京と東の包
ちくわ近はくわくわがけよくわうくわくわくわく
うねど常陸風土記に古者自相模國足柄丘坂以東諸縣ナ
總稱秋姫アツヒ國當時不言常陸唯稱新治筑波蘆城郡賀父
慈多珂國トコとあらそくわくわくわくわくわく
陸重のうゑきとくわくわくわくわくわく

三陳一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

○富士の名義

棟梁集云復小谷三思書云富士ハ風と吹自完乃つ
嶺の完ト風吹わんや風のスルマリとハ風
望の煙火のよしとみるよハ富士よりばととよわん都
れゆきにゆきと風のゆづりとりん神名帳に出雲
國意宇郡布有奈大穴持神社すこひ駿河國の富士
の神をさうといまひうりしなくもととくもいがくと
古傳也トモスルとびつゝくゆき
斯多也と高麗辨トモス富士ト富知と火出の

富は古書保の音とて不の考ふあらん古事記意富
岐義能・意富^オ富祁命、游富美夜比登富良^ナ富良^ラ富良^リもす
りて之をかの假字にとひしゆゑをひきともぞ
神名帳小富知神社ありも正^リと出でよづり
にム治とテヨモラミ日生と書リシハアモムトヨ
ろセテムルが富知^オ火出^ナ乃義ヤモトアキリ^リ富^ナトヤ^リ
キモツ得^リトムテ巔^{タケ}の穴トヨリシテ^リ火^リ出^ストモ^リ火^リ出^ストモ^リ
火^リ煙^リテ^リ火^リ出^ストモ^リ火^リ出^ストモ^リ

碑

文

記

文

記

文

記

文

記

文

記

文

記

文

記

文

記

文

碑也。寶永二年代實錦の貞觀六年五月駿河國言。
富士郡正三位淺間大神、大山少其勢甚。藏燒山方
ニ許里光炎火高二十丈。有雷地震三度歷十餘日。火猶
不滅。同六月甲斐國言。駿河國富士大山忽有黑
火碎。竈煙草木焦熱火氣苦。古之至火燒也。詩
曰。“宝永の火をあらひをさへして。火が古々生り。傳説詩
にゆる。おもやかなとひよそひあり。火神也。火神也。火
神を拾遺集。神樂詩にちる。やがてもわらひのあらむ
をやへす。ゆく。のじる。もとより。うつはのとく。
是れ富士や浅間のけづりやまとしもとわからぬ。

とえすものあり。富知神社。いそよろ御神といつたり
ぬ。大穴持神。りくあらむ。御大宮の社司。出せ
圖。あらと。富士の山の上に三神のあらむ。あらせ
中ハ度火を出見命。右ハ大山積。左ハ木華開耶姫命。左
御子を今ざまつり。右に火出。度火を出見命
と富知乃神。ソシテ。度火を出見命。御親。左
ノ木華開耶姫命。右に度火を出見命。御親。左
ノ火のうち。度火を出見命。御親。左
ノ木華開耶姫命。大山積。命。御親。左

三神とて其の事は古事記に
即作無戸八尋殿入其殿内以土塗塞而方產時以火著
其殿而產也故其火盛燒時所生之子名火照命次生子
名火須勢理命次生子名火速理命亦名天津日高日
子穗々乎見命也と有紀ノ神代卷一書云然吾田鹿革
津始自火爐中出來就而稱之曰妾所生兒及妾身自當
火難無所少損天孫宣之見之辛云くとて火のやうう
ありやセト火を出見命と即名をたまつて火のやうやえ
よしと富知の大神とつてすゑと云ふて木華院
耶姫命と淺間とすゑと云ふて淺間山にとどき

をひきよつて富知の神、浅間のかみとてんぐ谷川士清
が和訓祭に神紀・木華開耶姪ちて伊勢朝熊神社に
櫻木と其靈とも古紀よりえりて櫻の宮とも稱せり西
行の歎あり神名秘書の苔虫コケムシの神、櫻大刀オトメ自の神、体形容に
座せり苔生コケモロコシて一言紀也駿別浅間・木華開耶姪カミ
富士タケシマ也伊勢朝明郡アサケに布自神社櫻神社相並アリ
甲斐國金櫻神社此神カミとよゆるヨウルハ開耶刀カミをせ
せりて或ハ咲簇サキツクひきもの約アハくめとてゆりにつて
わざわざとて『淺間』アヒタもくの略也アヒタもくまくはなを裏アヒタ
さくさくのほりらと通音アヒタもくの櫻の轉アヒタりやうはあざぎ

開國安廟が云富知ハ火出の義セラレシソトモレド富士の神社
ハ浅間の神社ありアハ神名帳ナ駿河國富士郡富知神社也浅間
神社名神
大トヨリモ三代實録ナ正ミ位浅間大神大山セモアシフ
リ又ミ富知神社同郡沼津アリテ城内の神トウツモア
サクモツア立御云神体ハタマニ富士の名義ハ富知ナ火出の義
トヨ出モサクアシモ浅間大神ハ木尋咲耶姫命ヨリシムト
富士の神トヨモ富知の義トモモアドソシハ紀に方產時以火着
其殿而寢也トアヘガタシモ火を出見命ヨリシモアリト
アリモアリ別記載シトモアヘンナヒニ出アヘ

○五節のはめ

に其處と申す。」
「我の事は舊宿主の御上
皇として御坐りの御所を此處に其上
ある事無事の御所を此處に其上
ある事無事の御所を此處に其上

續日本紀考 天平十五年五月癸卯宴郡臣於内裏自王大
子親 檀立第 右大臣橘右衛禰 諸兄奉詔矣 大上天皇曰
天皇大命尔 坐而卷 賜久掛母 畏伎飛鳥淨御原宮尔 大八朔
新知志 聖乃天皇大命天下之治賜比平賜 比底所思坐久上下之齋
信 和氣也 无動久靜加尔 今有 尔八禮等樂等 二都並丘志 守久長
可有登隨神母所思坐此乃舞辛始賜比造賜比伎等聞食其與

○玉傳

續 日本紀云神龜元年冬十月丁亥朔辛卯天皇聖武幸
紀伊國ニニ甲午又詔曰登山望海此間最好不勞力遠行足
以遊覽故政弱濱名ハカハナ為明光浦宣置守戶勿令荒穢春
秋二時差遣宦人奠祭玉津嶋之神明光庫之靈忍海卒人
大海等兄弟六人除千人名從外祖父從五位上連通坐又
玉津之浦を參道ワタリ重井平賀而
傳と明光浦と名と改ゆくと紀小豆連通坐シラタマとすと
多岐りて好事の者りひむかず多岐りて事ありて紀
のすに方より多岐りて事ありて章句の錯れ文字の

善耳。室の事は今引文と津守連通姓の事と
津守取て姓を號して呼ぶ所と而て之を津守連通姓と
此の後取て海の母の通が姓あるに三十年と云ふ事と云ふ事
戸のやうに事あつて通姓の連と從ふせて忍海の連にすむ也
やうにせまし

○兼史記

後ちあると田に旅庵のつぶみを屋作りて塵埃を拂
の奥をやぶれととよじぬとたゞ庵のやひらとてまゝの
或ひ者大だ又ば置役火やくらとてちかくあまうてまゝの
をちかく申すもうちのとえ史の字歸てうそて顯昭り仰の既

後ちあると

五石代小田

五石代小田上席せざるあり行うとてかよす田塵工
あらがこやこりのゆ
井考る五石代小田凡田の方丈又とて
一石一ニ十六石と一畝と一十畝と一地と一町とて
七十セトと積て一石と一畝と一町と一地ハニ畝す
日古紀の漁の事とてちと刻せし唐木と石畝と通とて
本念とせりかえとて一石五石代小田と斗米と十町とて
十石とて一石とて小石とて必らに野と附てつゆとあら
家とてやまとてかよすとて多き哉とおきと山田の一代

やまとが物のやまとに似たりとてあらがまもあきぬの
物の代てかるがよもあらかじめとある

○○七の事

春の神を仰ぎる事の見ゆだす事はやん見えり
御神の御中かの中の正統をきてしるべくはとておもひ
思ひ美と夏の始よりはたまが思ひまくはとておもひ
す我の思ひあらうとくやんやんとけりえんともせんす
ひと親切いとへあらまづけてとく御ごくらとく達ニ神代差
りてテク自指間漏隨者古事記小自哉半傷久岐斯子也
よのくまつて事すとく候うとくゆきとくゆきとくゆきとくゆき

要

○二四三葉

拾遺集報のよしとくわゆりりとくのよしとくのよしとくのよし
八とつりとくのよしとくのよし

海のよしとくのよしとくのよしとくのよしとくのよし
安沖原つまくせとくのよしとくのよしとくのよしとくのよし
さくふみのニミタ"とくのよしとくのよしとくのよしとくのよし
くやにちとくのよしとくのよしとくのよしとくのよしとくのよし
とくのよしとくのよしとくのよしとくのよしとくのよしとくのよし
えくのよしとくのよしとくのよしとくのよしとくのよしとくのよし

あらは甚ものおよどり我れかにぞとへんとをまとい
てはやとひだ一層せめぬ絵今ふえんがおうたむぢんのま
前まくらものとてとくづまく

○久木

万葉筆子六赤へとまに「のまはおのとまかにとく木あす
はまに河原にとまうとまう」 申和多々とおうとおもておす
のまく林とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう
とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう
とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう
とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう

とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう
とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう
とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう
とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう
とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう
とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう
とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまう

○二劍の刀七枚刀

万葉四大作及上部女ノ人ナシモトニテアヤシマシヤメアシモ
ナシモトニテアヤシマシヤメアシモトニテアヤシマシヤメアシモト
ナシモトニテアヤシマシヤメアシモトニテアヤシマシヤメアシモト
ナシモトニテアヤシマシヤメアシモトニテアヤシマシヤメアシモト
天皇御事に文漏耶夜ミトムセキトニテ諸翁ノミニ劍ノ

日本記の神功皇后記云七枚刀一ロセラミ鏡一
面より一枚刀と云ふ。此の事はとてもいふるをと
て了御子と云ひて御子と云ふと告ぐる
まが」。又せね川ノ履中紀云西校船と云ふ事
あらゆる事と云ひて六帖刀の事也。又御子
に「せよみやうめり、ほどひつ我と刀をかく」と
有矣。神功紀云傳ふんとての無事の竟。人ゆやひ
えもきにひそやれ三日かの間隔にて而ふもと
えもきにひそやれ三日かの間隔にて而ふもと

今やちかの初うそとよき神功をさる燒くとて刀のみ
とあましやまくとよきせなゆまかとくもあまか
とよびまかとくにまくわらやまくわらゆまく
あまかはめ事すとせの事はあまかとくわらゆまく

筆記聞ひて重宝即ち之れニ致ちて之より
いまうたはる。和名所和名所、之を嘗てはすよも仕事仕事、
多き有り。如何の意に朝うるる、あるる、是れ、
どうぞあらわせ。せよぢとて、つゝ又おこすかく、繫縷繫縷。

乱やく四條大ゆきものやうすり。今故のいにまゆ。陸
様う蹊へと氣ト一名。木槿ともいは槿ともいふ。うらより
待候の章草。うらゆへあく。色のそれて立つ。やや公候
ともちやまちゆく。とみあくねどもあやまとはあく。
たるようくちくをの類。う事。う事。う事。

國を以てあらゆる物事の事は朝うさんと謂ふ事あり。其の
事はやうやく心にいだかうるゝ事無事。至る事よどみ無
事はひ夕にうきよと夕をひとつにしめしも無事よどみ
事は錦うる甚ひ通鳩が度ぐる被野七草うへし。舞
うれいすまく。男葉草にまづ、女葉草にまづ、桔梗うへし。

君が御産靈を大人しくて勇擣の法を桔梗うそとす事乃
千葉が桔梗をよみがへる
ほどのかくまえうひんともじまきはまくちあくの子
亦村田春ゆが桔梗とけう
ヨツウヒシムネとくふにうらう風をあらわせぬ
亦奉由由都るがう

由都司

○高田與清、あらわす考

○高田與清^ケちくわの考

まもじゆくはよみやうす

万葉代近記への書き下筆類林四の巻などに多く見えて
りんちくえづくさゆまとつまことつまどくす筆者不詳
セリハ万葉畧解に本友句をもじて實にいきがくと認る
ヨリトコト
マサカホ

後より桔梗を貰ひ可

牽牛子とけやうて
古今物名。拾遺
ものやふる。木槿をもくす

古今物名拾遺
ものあふる

木槿也むくす

多識篇三の卷 檻木類部 木檼和名年久計篇用集大全
の卷 年集年社三草木門に木檼和名ケノケト者益誤其音也
芭蕉句選秋部齊るに乃がくのもよすいよとてくまくら
すとも後名抄せの毫 蓮類部に文字集略云葦地蓮花
朝生夕化者之知名木波知須トヨタヨモトモトモ之若梗

卷之三

すとよきをもつて同名をもつて
あらわす。いはゆる「新義」の
一種のよひづれとちもえりや
くわゆゑといふ。

わがまゝのやうに思ふてゐるが、
おまえが君のあつたものと
ちよちよと重ねてゐるが、
さうしておまえの夫の
さうある夫の事、秋郷アサカニ權元マサヒコのまじしのせ伊勢イセ、
中ナカかのまゝ、似シらがま

花の事に經あるのを不
け幸を却く機知の上もよき人
とちり天子物秋郊二種

卷之三

萬葉集
古之言也
花の事
朝錦物

古事記傳の名は、此の書の文體が、古事記傳の文體を模倣して作成されたからである。

サヨク木槿

侏漢三弋圖會へ十四の卷灌木類部に木槿俗云無久計木
槿字音訛云々按木槿花有數品早瓣而大者名晝英以
賞之總木槿花朝開日中亦不萎及暮凋終日不再開寃
此槿花一日之榮之然其花僅一瓣故名晝英之說非也詩云
有女同車顏如蕢莘者其艷美耳々盛短旋花金錢花
壺盧白粉草牽牛子花黃蜀葵木芙蓉客杖桑櫻蘿樹

あらわのまことひもとく転じてはる
まきはり下をうなぎ左方度数

相模がん

けむとまづ身より生れずよしむを
かほるの心のあゆにそぞろて下ゆるまづくゆふをかほる
亦月詰七の毫セ月の都大に公暁の物
風かきぶるは氣をもじらせてソシカキモチテソシモ
新羅古帖すむかくうきの筆爲ゆるの字に
我さきにあらざる事多き筆の筆はあらざるも
知らぬの字に

先後の文
は必ずしもこの人の神髄よからざるの心

おもひつておもてこすの神原よかまくらのあらわ
ほのか

瑞有六帖あきのをのゑ入通ち接候
ひちあくまの事よりうきよもとすみりぬをも
夫木村秋郊ニ土脚門院御制

卷之二

ひよひあく坐もすむのを乃うみゆふとす
爲子千首

拾玉集六の卷に

くはゆるをりとお新かくすとくにゆくあるとる
續後撰集上の墨定經の事に

じうの事の神をあそびめあるとくで経とく

源氏あゆゑの事に

かのくあらゆるにちくさんめんうひもつて
あらゆるがゆくはくしてはくいとくにうるをとく

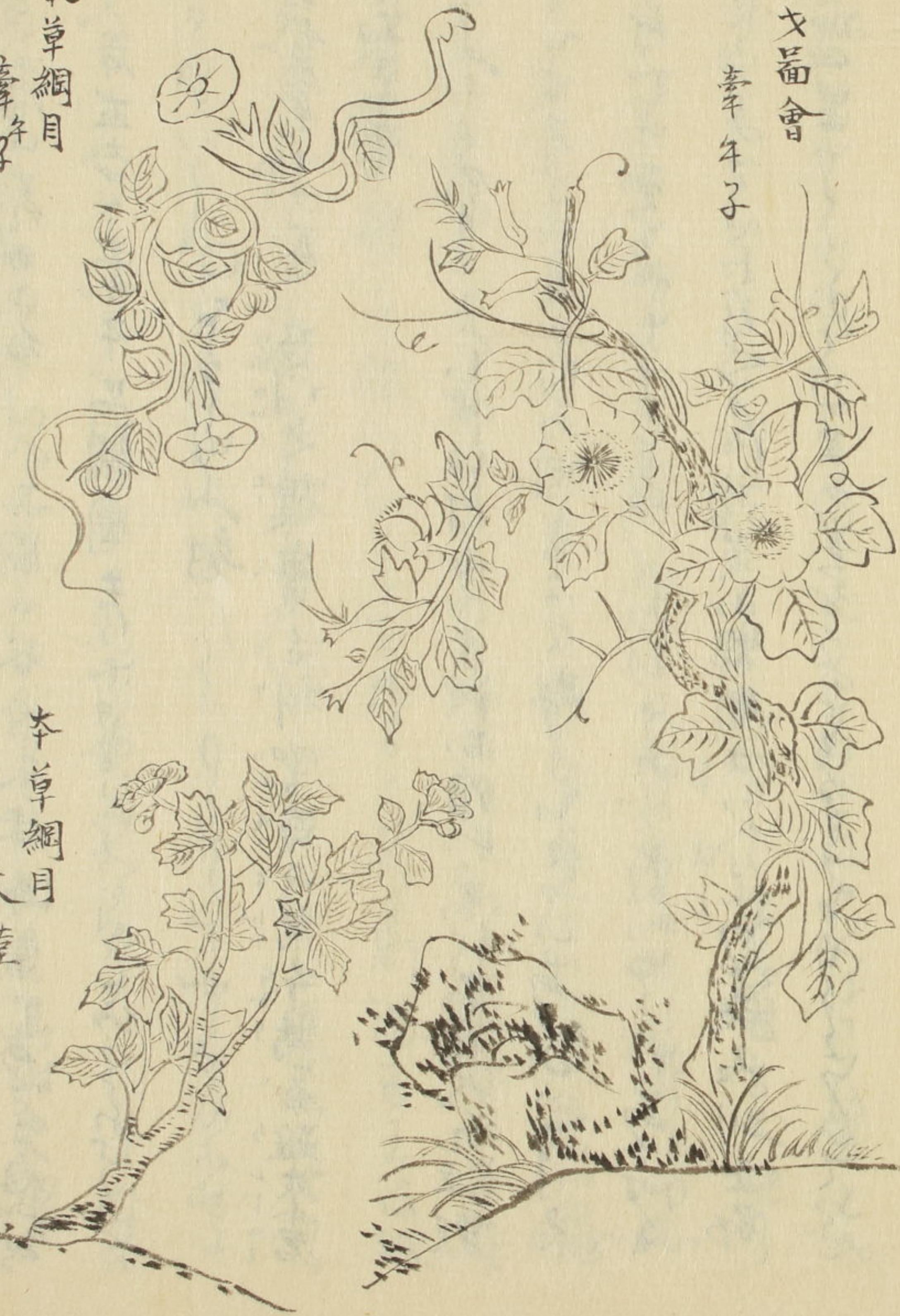
まくまくまく

秋はくとくみやうじよしもくれあらむうへくとくあらむ
野分の巻にさんむ一ちきぐのあひまくせじまく

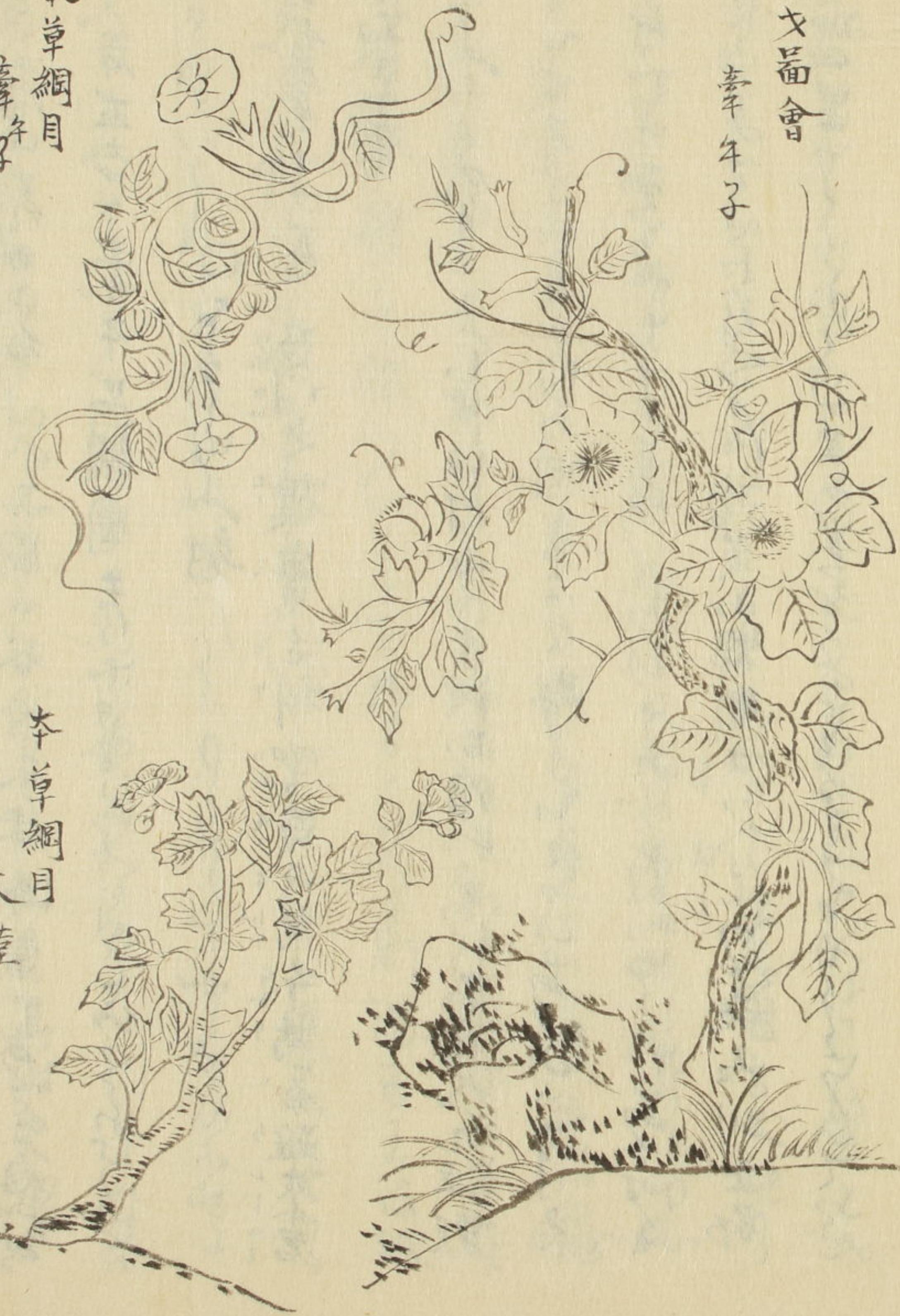
まくまくまく

和名抄草類部に章年子和名阿佐加保すとある、蔓之草の章年
子すとくわすとくわすとくわすとくわすとくわすとく
わすとくわすとくわすとくわすとくわすとくわすとく
わすとくわすとくわすとくわすとくわすとくわすとく
章年子とある、ヤドリクモウゲトスゲトスゲトスゲトス
ハニガ圖會證類本草本草綱目叔傳化鏡

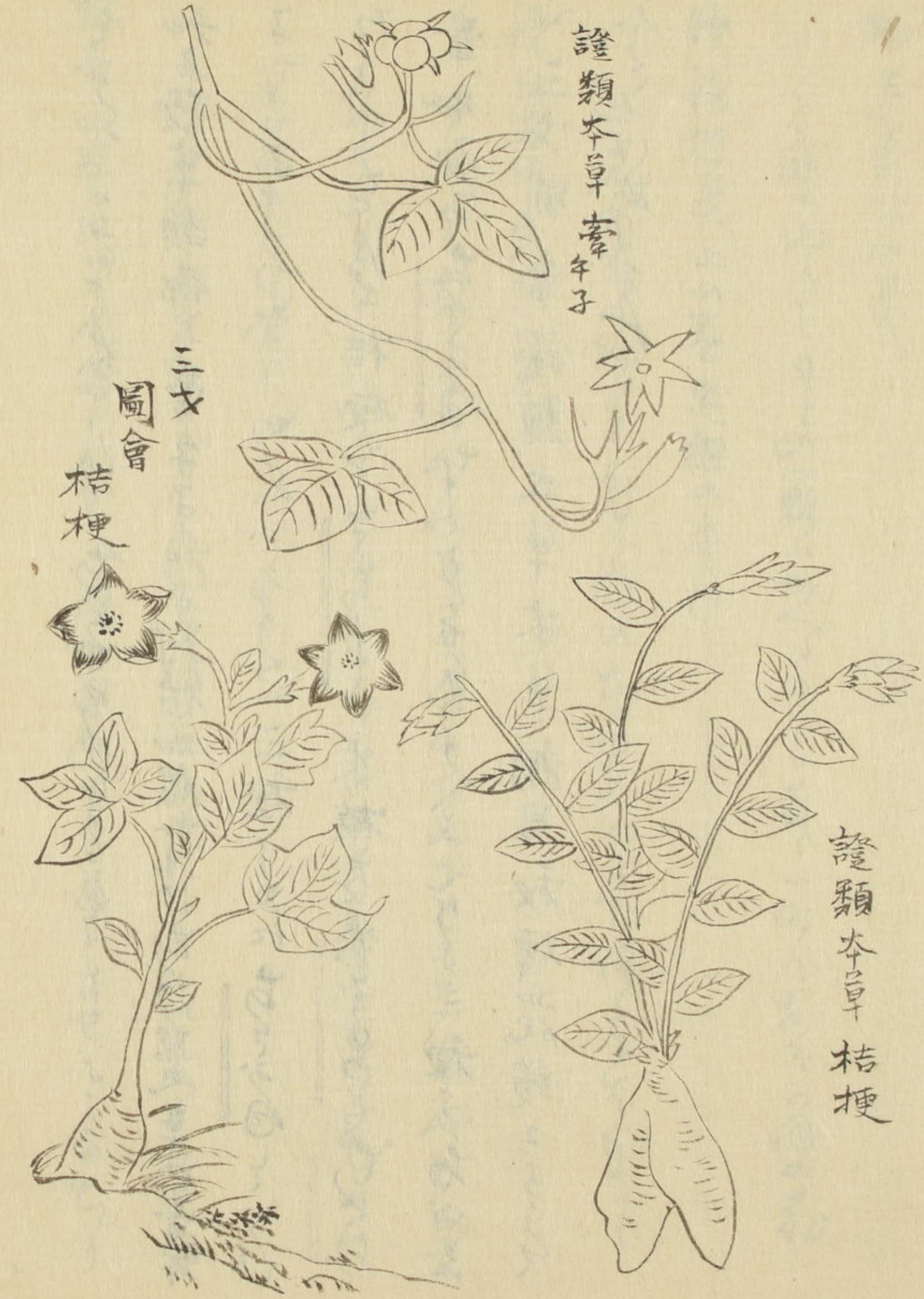
本草綱目
木槿



本草綱目
牽牛子



三戈屬會
牽牛子



證類本草
牽牛子

證類本草
桔梗

あくびの元ゆゑ) 嘉園の谷崎永律句當がゆきの記
峰岸正吉が臺灣呂類圖考也すと
とくもねりと

卷之三

曾不來座

覆盆子の如きもさうしておひきこむ
必ずゆめのうちにとまらかにまちへり。怪長眉も又紀零餘子
あくつわふとぞいふくらべてすとじをり。井とつも
ちよとくらべていよこくらべてひのくは。京にのる
りし東鳴たぐわやくらみのつりでみゆき
口因博の國にて縛つもひととほよとつる則。陽るまくらば
くまびーねふの思壁をかほのつすがふけくは。白川院
にくわいさんくわくは。白川院へてゆきりやせよ
とつれそよまよめざげりやのねと氣のくわくく。うきよ
つれそよまよめざげりやのねと氣のくわくく。うきよ

物故に於ける事に相應人をもせぬと
あらうと心に思ふよきをうこよ
御都三郎より人福原寅作

赤備軍アカミヨウを軍にし、コトハの四人シヨウジン、
神は背タケに立タチて、玉タマをより多くもつて、そよぐ
りうつむかひやくらむの神カミをすまへ、そを、
おきよせり。其強カツきよちゆくや、矛ヤリの意イニい、
とどきの所カタはたよんかみタマ、又源順スルヘン軍にせよ、
ひづれに中野正ナカノマサ、六月ロクニをえどに、
つまつまに

又七八年後，
○毛氏復歸之，
○毛氏復歸之，

萬葉集八卷

紀女郎縣大作
宿林家榜初

戲奴
和音

野處枝流芳

花曾
ハナソウ

御食而肥座

又高美已尼歌
トモ サカヌ
タロウツクサム

是不食牛水盡
ナ直麻尔の知官長ち教よのよとりひ其がも既アあれど后
アスニはトテ御事アムセ爾シテアム不知ヒテヒトヒ
アリモ上のやい育キシムシムシムシムシムシムシムシ
アリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモアリ

卷之三

وَمِنْهُمْ مَنْ يَرْجُو
أَنْ يُؤْتَهُمْ أَنْدَارِ
الْمَلَكَاتِ وَمِنْهُمْ
مَنْ يَرْجُو
أَنْ يُؤْتَهُمْ
أَنْدَارِ
الْمَلَكَاتِ

かどふ惜言の者いへり他物と言ふ惜上之者也
御内へ今まつてゐる所ちゆゑのうへと風ありせどもあら
きよし田まへ作ひしるいがれめどもさうと
風すずすとやへ風ふ外せむる令員オモテをとつてよき是風を
言ふ度とよきよのうへ之意かうよくとひ
うらとくわくと今御シテりづけられしも
獨言と稱りてよしも獨

らうともに同一段にゆるやかに借言^{ヤコウ}す。たゞ
眞剣の設^{カタ}を懸^{カタマリ}託^{ツテ}すと異^{ハズ}べし言と異^{ハズ}べし言と考^{ハシメテ}
わづかにいふ事^{ハシメテ}す。本^{ハシメテ}もやがて後^{ハシメテ}あつて、
ひくよき事^{ハシメテ}す。のちと後の人の口にまこと
たぐりこぼす所^{ハシメテ}す。直^{ハシメテ}もやがても
さすがに心^{ハシメテ}もあらずひくよき事^{ハシメテ}す。

○十
三日
立
日

禁物をせし
わはきのくわくにまくらるのひよ
とみはくとけくわくと下界をうづくゆ

卷之三

日記

船のあごをまつた
四十日
四十五日



○吳竹可集

はるかに
号ひはく行ふ事も
御座ヤハらぬ

伊保齋

人不寐
五口疊三重乃何召之騷
裏尔如是鶴跡鳴何蝦可物
夫出其事也

○二十一
川

古事記 日本武尊自其地幸到三重村之時亦詔云吾足如三重句甚疲故号其地謂三重

三重川は左より四日市に源すに三重川と名す一名脚
歸川と/or或は三重川と書く大原の延長もしくて三重川
の字セ里中流の西よりうへて海に注ぐ所と云ひ其處
海鮮ふつづく

或云三重川の古名り「四日市」上流を延喜
式内神前神社ありけりとて夏秋の禊事ありを
じつめ御代すかくらやかくら也

右東海道名所圖全集

